

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23656373

研究課題名(和文)北関東の町並みの建築的構成とその展開過程に関する研究

研究課題名(英文)The Architectural Composition and its Transformation of Traditional Towns in the North Kanto Region

研究代表者

藤川 昌樹 (FUJIKAWA, Masaki)

筑波大学・システム情報系・教授

研究者番号：90228974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、i)北関東の町並みはおよそ戦前期頃まで、A江戸型町家、B農家同源型町家、C簡易構造の雑舎(クラ、ミセ、コヤ、「カリブシン」の町家、など)、の三種の建築により構成され、ii)町並みの中にCが少なからぬ比率で存在し、これらの建て替えが戦後急速に進んだため、町並みの建築タイプは多様だが、残存率は高くないという町並みの特色が生まれたとの仮説を、実測・所在調査等により検討した。また、研究期間内には北関東では東日本大震災、つくば市北条地区の竜巻被害という二度の大きな災害があったので、これらの災害における伝統的建造物の被災・復旧状況も実施し、建物の頑健性・復旧可能性についても検討した。

研究成果の概要(英文)：In this study the hypothesis was examined by architectural surveys that because 1) the buildings of three types(A: Edo type townhouse, B: Townhouse that has the common origin of farmhouse s, C: Several simple and flimsy structure buildings) composed the traditional towns in the North Kanto region before World War II, and 2) The C type buildings occupied a significant position in the towns, but most of them were destroyed after the war, as the result although the traditional buildings have diversity, their survival rate is low.

In addition, since the great earthquake in the east part of Japan and the tornado in Tsukuba occurred in the research duration, the damages and rehabilitations of traditional buildings were also surveyed in order to examine the robustness and resilience of them.

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：江戸型町家 農家同源型町家 簡易構造の雑舎 クラ ミセ コヤ カリブシン 頑健性

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで十数年にわたり、茨城県の歴史的市街地を主たる対象として町並み・民家調査を実施し、その成果を『八郷の住文化』(1-3、1998-2000)、『つくばの民家』(2002)、『真壁の町並み』(2006)、『鯨ヶ丘の町並み』(2010、ただし未刊)等の報告書の形でまとめて来た。その結果茨城県の歴史的市街地には、極めて多様なタイプの伝統的町家が現存していること、だが町並み全体としてみると現状では伝統的建造物の残存率は高くはないことに気づいた。また、これらの特徴は、北関東の他の2県(栃木県・群馬県)でも同様であることが分かった。しかし、この特徴の生じた理由・プロセスは従来の研究からは未だ明らかではなく、北関東の町並み・町家建築そのものについての新たな理解の枠組みを提示することが必要であると痛感するに至った。

近年町家建築についての研究は急速に進展している。町家の成立過程に関する新説＝長屋起源説を発表した野口徹『中世京都の町屋』(1988年)に対し、高橋康夫『京町家千年のあゆみ』(2001)が小屋・店・棧敷複合説を提示するなど起源に関する議論が深まりつつある一方、大場修『近世近代町屋建築史論』(2005)は遺構調査から京都型町家と在り型町家という類型概念を設定した上で、両者の相克が行われた場として歴史的市街地を捉えるという新たな視点を提供している。また、土本俊和『中近世都市形態史論』(2003)は野口説を敷衍させて中・近世移行期の都市形成史の中に位置付ける試みを行っている。

しかし、これらの注目すべき近年の研究は基本的に京都を中心とした近畿地方を主たる研究対象としている。関東地方については、玉井哲雄『江戸』(1986)、河東義之「見世蔵の普及と「蔵の街」の成立」(1999)などの先駆的な業績があり、本研究でA江戸型町家と措定するタイプの町家についての研究こそわずかにみられるものの、全体として研究は著しく立ち後れている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、北関東の伝統的町並みの二つの特色(α多様なタイプの町家から構成されている、β現況では伝統的町家の残存率は高くはない)を説明する以下の仮説を検証することにある。すなわち、i)北関東の町並みはおおよそ戦前期頃まで、A江戸型町家、B農家同源型町家、C簡易構造の雑舎(クラ、ミセ、コヤ、「カリブシン」の町家、など)の三種の建築により構成されていた。Aは定型化が進んでいたが、B・Cには様々なヴァリエーションがあり、定型を獲得する前に戦後を迎えた。)町並みの中に、Cが少なからぬ比率で存在し、これらの建て替えが戦後急速に進んだ。という事情があったため、上記α・βの町並みの特色が生じたのではないかとの

仮説である。

この仮説を検証するため、遺構の現存確認・実測調査をもととした分析作業を行う。

3. 研究の方法

上述のように、本研究は二つの研究項目により構成される。

一つは仮説i)に関わるもので、C簡易構造の雑舎のヴァリエーションと建築的特色を実測調査により解明することである。茨城県常陸太田市鯨ヶ丘地区に存在するCの建造物の実測調査を実施した。もう一つは仮説ii)に関わるもので、Cの比率が町並みの中でどの程度あり、戦後建て替えがどの程度進んだのかを史料分析・現存確認調査により検討することである。町並みの全体像を把握できる家屋台帳が茨城県桜川市真壁地区に残されているので、同地区の分析を実施した。

当初は、北関東の他の2県の町並みでも上と同様の分析を行う予定であった。だが、2011年3月11日に東日本大震災が、2012年5月6日につくば市北条地区の竜巻被害が相次いで発生し、本研究の対象となる伝統的建造物が大きな被害を受けたため、他県での調査は取り止め、代わりにこれらの被災・復興状況の調査を行うことで、本研究において重要な建造物の頑健性・復旧可能性についての知見を得ると共に、都市史的な位置付けを図るというアプローチを追加することとした。

4. 研究成果

2011年度は、(1)研究史の中でのこれまでの北関東の町屋の位置付けを再確認した上で、(2)常陸太田市鯨ヶ丘地区において、A江戸型町家、B農家同源型町家、C簡易構造の雑舎の残存状況を確認し、(3)Aタイプ2棟、Cタイプ2棟の実測調査を実施し、図面作成を行った。また、(4)2011年3月に発生した東北地方太平洋沖地震による地震が、これらの町屋にどのような影響を与えたかを、茨城県内の伝統的町並み(太田・真壁・結城・古河・下館・土浦・石岡など)において目視調査により検討した。

この結果、Aタイプの町屋にもCタイプの建築を一部に組み込んだものがあること、Cタイプの町屋でも、内部意匠には手の込んだものが現存すること、東日本大震災ではAタイプの町屋の被害が大きい一方で、(意外なことに)Cタイプの町屋の被害が軽微であり、地震に対してはCが脆弱とは必ずしも言い切れないこと、などが判明した。

2012年度は、(1)桜川市真壁町における「家屋台帳」登載建物と現存遺構の比較調査、(2)2012年5月6日に竜巻被害にあった、つくば市北条の町並みの被災状況調査、(3)徳島県美馬市脇町・高知県室戸市吉良川町・岡山県倉敷市において比較調査を実施した。

このうち(1)では、当初の研究計画通り、明治35年(1902)に作成された家屋台帳に登載さ

れた敷地・建物の比定を現地で試み、異同状況を確認した。この結果、杉皮葺き・板葺きの建物が瓦葺きへ変更されるケース以外にも、瓦葺きから瓦葺きへ建て替えられるケース、取り壊されて空地になるケースが存在することが判明した。

また、(2)は当初の計画では想定外であったが、つくば市で遭遇した竜巻被害の調査を行うことができた。目視を中心とした被災状況の確認・図面作成により、2011年の東日本大震災時の被害とは異なり、堅牢な土蔵造り建造物の被害が軽微であったことが判明した。

(3)では西日本にも吉良川町のように、近代に入ってから後世に残るような本格的な町家建築の多くが建設されたケースもあるが、全体的に定型化は比較的早い段階で進んでいたと推定されることを確認した。

2013年度は、(1)前年度から継続して桜川市真壁町における「家屋台帳」登載建物と現存遺構の比較調査を実施するとともに、(2)2011年3月の東日本大震災後の関東の町並みの被害・復興状況のまとめ、(3)つくば市北条の町並みの形成過程調査を実施した。

このうち(2)では、震動による被害が県全体でみられ、土葺き瓦のずれ、大壁の崩落が広範にみられたことを確認した上で、震災前に保存・活用・修理の各局面が全てでなくとも適切に行われている建造物の場合に、復興も円滑に進みやすいという知見を得た。(3)では古代以来の歴史を持つ当該地区が、郡衙と条里制、戦国期城下町、近世在郷町という各時代の歴史的背景が反映されたエリアがずれを伴って積層していること、一方で現存する建造物自体は19世紀以後の建設のものであることも確認した。

3ヶ年度の研究の結果、研究当初で設定した仮説は大筋において妥当ではないかとの感触を得ているが、A～Cの三つの建造物類型の属性記述、近代化における消失プロセスの記述、などの点で未だ曖昧な点を多く残している。特に震災・竜巻被害の調査から、仮説の修正が必要であると認識するに至った点が少なくなかった。これらを課題として引き続き研究を継続したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

藤川昌樹、「地域の文化的資源としての古民家とその再生」、農村計画学会誌、32-3、pp.108-112、2013、査読無。

藤川昌樹、「関東地方・茨城県における被害・復興」、建築史学、59(建築史学会2012年度大会記念シンポジウム「建築史学と災害」の記録)、pp. 27-31、2012、査読無。

藤川昌樹、「地域の文化財建造物にゆっくりと迫る危機」、建築雑誌、1631、PP.14-15、

2012、査読無。

[学会発表](計12件)

藤川昌樹、「鯨ヶ丘の歴史を活かしたまちづくり」、鯨ヶ丘商店会・NPO結合同企画「鯨ヶ丘の歴史的建造物保全活用から地域の活性化を考えよう!」、2014年2月19日、常陸太田市商工会館、茨城県。

藤川昌樹、「桜川市真壁町の歴史を活かしたまちづくり」、筑波山麓古民家シンポジウム「アイラブつくばまちづくりキャンペーン支援事業」、2013年12月21日、華の幹、茨城県つくば市。

柘植大輔・藤川昌樹、「茨城県内の醤油醸造元の立地と建築」、日本建築学会大会、2013年8月31日、北海道大学。

海渡由紀子・藤川昌樹、「つくば市北条における古代から現代にかけての空間形成」、日本建築学会大会、2013年8月30日、北海道大学。

藤川昌樹、「桜川市真壁伝統的建造物群保存地区と東日本大震災」、全国伝統的建造物群保存地区協議会関東甲信越静岡ブロック会議研修会、2013年8月29日、真壁伝承館、茨城県桜川市。

藤川昌樹、「歴史的町並みと建築の調査：常陸太田市鯨ヶ丘を事例に」、いばらき地域文化財専門技術者育成研修2013、2013年8月24日、下妻市光明寺、茨城県。

藤川昌樹、「真壁の震災被害と復興：「備えあれば憂いなし」か?」、気仙沼・尾形家修復保存会主催シンポジウム「故郷で守りたいものがある。」、2013年7月14日、山梨県甲州市「甘草屋敷」。

藤川昌樹、「茨城県における歴史的建造物の被害とその調査・復興」、建築史学会大会シンポジウム、2012年4月21日、東京藝術大学美術学部中央棟第一講義室。

藤川昌樹、「北関東における歴史的建造物の被災状況について」、東日本大震災自然・文化遺産復興支援プロジェクト「復興支援の集い」、財団法人日本ナショナル・トラスト主催、2011年8月29日、国立新美術館講堂、東京都港区。

岡田脩一郎・野中勝利・藤川昌樹・不破正仁・佐藤未来、「茨城県桜川市真壁地区の町並み模型制作とその意義」、日本建築学会大会、2011年8月23日、早稲田大学。

山本英毅・藤川昌樹、「常陸太田市鯨ヶ丘地区の構成と歴史的建造物の特性 その8 鯨ヶ丘の町家小屋裏に見られる墨書について」、日本建築学会大会、2011年8月23日、早稲田大学。

藤川昌樹、「茨城県内の歴史的建造物における震災被害の特徴-登録文化財調査を中心とした報告-」、日本建築学会建築歴史・意匠委員会災害特別調査研究WG中間報告会、2011年6月11日、建築会館、東京都港区。

〔図書〕(計4件)

藤川昌樹、「被災建築の復旧・復興から学ぶこと：茨城県の調査から」、『災害への対応と対策：歴史的建築を未来に伝えるために』日本建築学会大会建築歴史・意匠部門研究懇談会資料、pp.17-19、2013
藤川昌樹、「重要伝統的建造物群保存地区における建築行為：真壁伝承館を事例に」、『利用の時代の歴史保全：保存・再生・活用の立脚点を考える』、日本建築学会大会建築計画部門研究協議会資料、pp.45-48、2012
野村俊一・是澤紀子編、『建築遺産 保存と再生の思考 災害・空間・歴史』、東北大学出版会、pp.161-176、2012 .
日本建築学会編、2011年東北地方太平洋沖地震災害調査速報、日本建築学会、pp.564-567、2011 .

〔その他〕

ホームページ等

<http://wright.sk.tsukuba.ac.jp/fujikawa/index.html>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

藤川 昌樹 (FUJIKAWA , Masaki)
筑波大学・システム情報系・教授
研究者番号：90228974